

西宮啓典

著 岩波新書

第三卷

第一分冊

日本の美術と古典

岩波新書 第三卷 第一分冊



岩波新書

160



西郷信綱
永積安明著
廣末保

日本文學の古典

岩波新書

西郷信綱

1916年大分縣に生まる

1939年東京大學文學部國文學科卒業

現在、横濱市立大學・法政大學教授

著書—國學の批判、日本古代文學史

永積安明

1908年山口縣に生まる

1932年東京大學文學部國文學科卒業

現在、日本學術會議會員、神戸大學
助教授

著書—中世文學論、平家物語

廣末保

1919年高知縣に生まる

1941年東京大學文學部國文學科卒業

現在、法政大學教授

著書—芭蕉

日本文学の古典

岩波新書（青版）160

昭和29年3月20日 第1刷發行

¥ 100.

著 者

さい
西
なが
永
ひろ
廣

むら
郷
づみ
積
すえ
末

のぶ
信
やす
安

つな
綱
あき
明
たもつ
保

東京都千代田區神田一ツ橋2—3

發行者 岩 波 雄 二 郎

東京都新宿區改代町24 理想社

印刷者 田 中 末 吉

發行所 東京都千代田區 株式 岩 波 書 店
神田一ツ橋2—3 會社

落丁本・亂丁本はお取替いたします

桂川製本

はしがき

たんに古典のなかにかえっていき、それに溺れることによって、古典は生かされない。そうかといって、古典をきりすててしまつて、それに目をつむればいいかといえ、そうもいかない。それではわたしたちは歴史のない人間になつてしまふ。また、現に古典はいろんなかたちで生きてもいる。古典文學をよもうとすると、たれでもこうした矛盾につきあたり、どうよんだらいいのか、という疑問をいだくのではないかとおもう。

むろん不充分にしかやれなかつたけれど、こうした疑問にすこしでもこたえてみようと、わたしたちはこの本をかいてみた。だからこの本は、いわゆる日本文學通史といった類のものではない。もっと自由に、日本文學の背骨となつてゐるような大事な作家や作品に焦點をしぼり、そこを中心に古典の再評價、よみなおしということを、なるべく具體的にやってみようとしてとめた。

執筆分擔は、一章から四章までを西郷が、五章から八章までを永積が、九章から十二章までを廣末がかいた。出版にあたっては、岩波書店の堀江鈴子氏、高草茂氏、箕浦君子氏等の勞に

負う點が多い。あつく感謝する。なお、わたしたちは、讀者からいろいろと批判していただいて、なるべく早い機會にこの本をかきあらためることができるようになりたいとおもっている。

一九五四・一・三

著 者

目次

一	神話と敘事詩	一
二	萬葉集	一六
三	源氏物語	三九
四	女の文學	五四
五	説話の世界	六九
六	平家物語	八五
七	能と狂言	一〇五
八	隱者の文學	一二九
九	芭蕉の俳諧	一四五
十	西鶴と戯作者	一六六

十一 近松の悲劇 一八

十二 歌舞伎 二〇

索引

一 神話と敘事詩

人間がもし、自然の力にまったく頭があがらず、暗い恐怖にみちた生活のなかにずっと閉じこめられ通しであつたとしたら、人間はものを作る力、そして作り話を作る力、つまり空想力をもつことができなかったにちがいない。けれども人間は、自然の力とたたかってきた。また、生活の恐怖ともたたかってきた。そして、そういう人間的自由のためのたたかいのなかから、ゆたかで多面的な空想力を發展させてきた。ところで、人間のこうした空想力が文學上さいしよに結晶したものが神話である、と考えてよい。

たとえばわが國には、スサノオの命がヤマタのオロチを退治したという話がある。『古事記』にはそのオロチのありさまを、「それが目は赤かがち（ほおずきのこと）なして、身一つに頭八つあり。またその身に蘿こけまた檜ひ生ひ、その長さたにや八谷たにを峽八尾をわたりて、その腹を見れば、悉ことごとにいつも血あえただれたり」とかいてある。當時の人々にオロチがどんなに怖ろしい怪物として印象づけられていたかがこれで分るだろう。しかもこのオロチは、來る年ごとに人間の

處女をいけにえに要求した。これをスサノオの命は、人間らしい智慧と勇氣とで退治した。そのため肥の河は血となって流れたというのだが、ここに表現されているのは種族間の鬭争であると考えられやすい。けれども神話をそういう比喻だと考えるのは一般に正しくない。これは人間と自然との鬭争、つまり動物の姿であらわれてくる自然の原始的な怪力とたたかって、それにうち勝とうとする人間の行動が空想化されたものである。古代人はこういう空想の世界で自然を支配し、みじめな原始社會から解放されようとした。

また『常陸風土記』^{ひたちぶとぎ}には次のような話が伝えられている。行方郡^{なめかた}に箭括氏^{やはさ}麻多智^{またち}という人がいた。彼は葦原をきりひらいて新しく田を作ろうとした。そうすると蛇の姿をした夜刀^{やと}の神が群をなしてやってきて、さんざんに仕事の邪魔をした。そこで彼は大いに怒り、鎧をつけ、仗^{ほこ}をとり、夜刀の神をうち殺し追いはらった。そして山の口までやってゆき、杭をたて塚の堀を作り、夜刀の神に告げて「此より上は、神の地たることをゆるさむ。此より下は、人の田となすべし」といい、こんど、たたりがないように社を設けて祭ったという。

地方農村にも、スサノオの命のオロチ退治と同じ性質の話がこのようにかたり伝えられていた。蛇は、當時の人々には、水を支配する怖ろしい原始的な神だと考えられていた。それとたたかって農業生活を確立し、人間の文化を高めようとする欲求のなかから、こういう神話は生れてきたのである。いろいろ趣向はかわるけれども、化けもの退治は、後の昔話や講談の主

題にもうけつがれていった。『御伽草子』^{おとぎぞうし}にのっている「俵藤太物語」や「酒吞童子」^{しゅてんどうじ}なども、やはりこの系統にぞくする。

しかしそれにしても、スサノオの命とは、どういう人物であろうか。また、神話は文學の發展にとって、どういう意味をもったであろうか。これを知るには、『古事記』をもっとよく讀んでみなければならぬ。

イザナギの命は、多くの神々を生んだが、さいごに天照大神、月讀命^{つきよみの}、スサノオの命という三人の子を生み、それぞれ高天原、夜の食國^{おすくに}、海原を治めるようにいつけた。ところがスサノオの命だけは、そのいいつけをきかず、「妣の國」^{はは}にゆきたいといって、地團太をふんで泣きさわいだ。「その泣きたまふさまは、青山を枯山なす泣き枯らし、河海は悉に泣き乾しき」というぐあいであつた。このイメージは古代的な美しさと大きさをもっているとおもうが、こういう泣きかたじしんのなかに、すでにスサノオの命の烈しい性格と個性がよくあらわれている。しかしこのため彼は、父から「然らば汝は^{みまし}この國にはな住みそ」といって追放された。それから高天原にのぼってゆくときも、「山川悉に動み、^{とよ}國土皆震りき」といわれている。そこで天照大神はききおどろき、彼のやってくるのは、きつとじぶんの國を奪おうとしてにちがいないといい、勇ましく武裝をととのえた。さて高天原でスサノオの命がどんな亂暴をはたらき、そ

の結果がどうなったかは周知の通りである。天照大神は岩戸にかくれた。そのため永遠の夜がやってきた。それでスサノオは罪人として、ひげと手足の爪を引きぬかれ、高天原から追いはらわれた。それから出雲の國の肥の河上にくだり、ヤマタのオロチ退治をするという順序になるのである。

いうまでもなく『古事記』の作者は、天照大神を神代の物語の一ばん大事な主人公としておし出そうとしている。それは天照大神、つまり日神が、皇室の祖先神であるためである。ところで天照大神は、作者が熱心なのに反して、一向に生き生きとは描き出されていない。天上にのぼってくるスサノオの命と對決しようとする場面では、さすがに人間らしい血の氣のあるところを示すけれど、おおむね一つの神聖な絶對者、國家理念の象徴といったふうなものにしかなっていない。つまり、人物としては死んでいるのである。これは天照大神という人物が、皇室中心の専制政治につかえる思想によって觀念的にでっちあげられたものであり、何ら民衆的基礎をもっていないかったためである。

むしろ天照大神と葛藤し、それと争ったスサノオの命の方が、生き生きと劇的に行動している。彼は父の命令にも従わず、また天照大神の支配している世界でも、じっとおさまっていることができず、雄大に泣きわめいたり、亂暴をはたらいたりして、二度も追放をくらった。『古事記』の作者は、こうして彼を不逞な惡者にしあげようと、ひたすらもくろんでいるかのよう

である。ところが、そういうもくろみを裏切って、スサノオの命はかえってあざやかな英雄的個性として描き出されるに至っている。

これは彼の性格が、民衆生活に基礎をもち、それをじぶんのなかに、になっていたからだとおもわれる。高天原を追い出されて出雲にくんだり、そこでオロチを退治して民衆の苦しみを救ったスサノオの命は、民衆につかえる神だといえないだろうか。オロチ退治に似たいいつたえが、日本の古代農村でひろく語りつがれていたらしいことは前にのべたが、スサノオの命は、いわばそれを神話的に典型化した人物であった。

しかし、スサノオの命のこうした英雄的個性も、不屈につらぬき通されないうで終らざるをえなかった。すでに、彼の性格につきまといっている地靈のような暗さは、専制政治にくみしかれてゆこうとしている民衆生活の暗さに通じるものがあるとおもうが、オロチのしっぽから出てきた太刀を天照大神に献上して皇室と和解をとげたとき、あきらかに彼は敗けたのである。また、このように描かれたため、彼の性格も甚だ一貫性のないものとなっている。因幡いなばの白兎で有名な大國主の命が皇室に國ゆずりをしたさいにも、やはり民衆的なものの敗北があった。

これは日本の英雄時代、つまり原始社會から解放されようとする民衆の力が英雄の個性を通して表現された時代のエネルギーが、皇室を中心とする専制政治の壓力に敗けていったことを意味するものと考えられる。専制政治ができあがってくるのにたいしてたたかい、それに抵抗

した民衆の力がなかったのではない。それはあった。あったけれども敗けたのである。だからこそスサノオの命のような人物が、とにかく形象されえたのである。そして、それがとどめをさされて、とうとう敗けたところで、『古事記』が作られることとなった。

神話は歴史の事實をかたっていないので信用できぬ、という氣持がわれわれには強い。神話を歴史の事實であるかのようにおしつけた國家主義教育にたいする反撥である。しかし神話をたんに馬鹿々々しい、とるに足らぬ話だとしてしまわないで、先にのべたような觀點から、その意味をとらえ直してみる必要がある。神話はそもそも作り話なのであり、そして作り話であることによって、それは古代の敘事詩が生みだされるための土臺となったのである。

神話を草木のものという原始蒙昧の世の産物であると考えるのはまちがっている。人間の經驗と智慧とが、原始時代の呪術的な祭や行事を、批判し克服しようとするたたかいのなかから、神話は空想されてきた。動物神に人間の處女をいけにえにささげる、野蠻で殘忍な原始的風習を否定する新しい神としてスサノオの命が行動している點を想いおこしてほしい。

いうまでもなく、原始のお祭のなかにも、すでに人間の空想力は宿っていた。第一、自然の壓力にうちかとうと欲したからこそ、人間は呪術的な祭を實踐したのである。けれども、そこにあらわれている空想力はまだ弱く、崇拜される神々にも、まだ名前すらあたえられていなか

った。その神々には人間らしい個性や履歴もなかった。それに比べると神話の世界ではたらく神々は、もっと人間化され個性化され、古い神々のもっていたような動物的な要素をはぎとられた姿であらわれてくる。というより、こういう新しい神々を中心とした物語こそ神話であった。神が人間を作ったのではない。人間が神を作ったのである。そして人間の世のなかの發展、つまり人間と自然との關係の變化が神々の姿をもかえていった。神話の神々の棲家は多くは天上にあるが、地上で強くなってきた人間の力が、神々を天上におしあげていったのだともいえる。神々の姿も天上に追放されることで人間化し、純化された。

けれども、人間はまだ神々から自由にはなれなかった。神話の空想力が物語や小説などのそれと根本的にちがうのも、その核心に集團の呪術的な祭との關係がなお保存されている點にある。物語や小説とちがい、神話が信じられた理由がここにある。また、神話の世界にわれわれのなかなか理解しにくい非合理の要素がまじりこんでいるわけも、ここにある。しかし一方、神話の空想力が個人的・主觀的ではなく、集團的・現實的であり、かつ若々しい力にあふれているのも、このためであった。そこには、生産を高め生活の自由をもとめようとする集團の意欲が投影されているのである。つまり、古い祭儀との關係をもちつづけながらも、それから飛躍して、新しい詩的・藝術的世界を創造しようとした點に、神話的幻想の特質と意義があった。ギリシア人は、こういう飛躍をなしとげて神話の神々を作り出したのは、民間の巡遊詩人た

ちの功績であると考えていた。原始社會からの人間的解放をなしとげた民族にとっては、これはきわめて自然な考えであるといえよう。しかし残念ながら、日本民族の古代では、原始社會からのこの人間的解放というしごとが、民衆的なひろがりでは、つらぬかれないうでしまった。そして巡遊詩人ではなく、専制權力が神々の世界を作り出すというかたちになった。

日本の古代にも、いろんな美しい神話、あるいは神話の素材ともいうべきものが民衆生活のなかに芽ばえていた。それは『古事記』の神代の巻をよんでも、『風土記』をよんでもわかる。海さち山さちの話のように、今日までよろこばれ、親しまれているものもある。とくにスサノオの命と大國主の命を中心にした出雲系神話には、民衆生活の色彩がかなりよく出ている。けれども大體からいうと日本の神話は、芽ばえのうちにすみ枯らされ、思う存分のびないで終った。つまり奔放に、ロマンチックにその空想力を飛躍させることができなかった。

原始社會とのたたかいが不徹底であつた結果、専制權力がかなり早い時期に作り出され、それが神話の自由な藝術的發展をねじまげたためである。その専制權力は、やがて古代天皇制として完成した。

別ないいかたをすれば、これは神話が自由な發展をとげないうちに、神道という新しい宗教の教義のなかに組みこまれていったことでもある。神道というのは、克服されないうままに残された原始的な呪術の祭を、天皇制の立場、權力者の立場から再編成するために作られた宗教であ

った。天皇制神話ということばがよくつかわれるが、それは本來の神話ではなく、すでに墮落した神話であることを知らねばならない。イザナギの命のミソギの物語にせよ、天照大神の天の岩戸の物語にせよ、またニギの命の天孫降臨の物語にせよ、はなはだ神道くさい。そして神道くさいことで、反人間的、反藝術的なものになってしまっている。

日本の神話はこうして、専制權力につかえる神道という宗教によって、その藝術的生命を破壊されていった。そしてこれが文學上とくに大事なのは、神話の生命が破壊されたため、それを母胎として生れてくるはずの古代の敘事詩が、やはり大きな挫折をこうむらざるをえなかった点である。

むろん原型はもっと前から出来ていたにちがいないが、『古事記』は奈良に都が遷ってまもなく七一二年に政府の手で作られた。序によると「邦家の經緯、王化の鴻基」、つまり天皇政治の根本を定めるためにそれを作ったという。『古事記』が、民族生活の歴史を敘事的に全體的に再現した文學になれなかったのは當然である。ことばは適當でないが、それは天皇家の私小説にならざるをえなかった。皇室というものがすでに、民族や民衆の利害とは相反する存在となっていたからである。『古事記』のなかで代々の天皇がどんなふうに描かれているかを一見するだけでよい。くわしくふれる餘地がないので略すが、要するにそこでは、天皇制ができあが

った時期の、そして『古事記』が作られた時期の天皇の姿が、ほとんどそのまんま過去に投影され、天照大神がそうであったようにひからびた理念としてしかかかれてない。そして日本國には太初以來、天皇という専制君主がいて、その専制君主の手で政治がずっとやられてきた、というぐあいに過去の歴史がおくめんもなく現代化されてしまっている。

だが歴史を現代化するのは、歴史的なやりかたではない。それは歴史文學の方法としても正しくない。過去を以て現代を打て、ということばがあるが、過去は現代を肯定し、合理化するために要るのではなく、むしろ現代を反省し批判するためにこそ要る。そういう必要から過去と現代とがどんなふうにつながっているかをあきらかにし、その過去のなかから現代がどんなふうに必然的に生長してきたかをとらえようとするところに、歴史文學の独自の役目と價值とがある。しかしそれにはどうしても、歴史の眞實が第一に重んじられなくてはならない。あれこれの、こまごました歴史事實ではなく、それらをつらぬいて流れる社會的な力がリアリシックに表現されなくてはならない。この大きな歴史の眞實が、『古事記』では、はなはだないがしろにされている。こうして他の諸豪族の独自の歴史とその意義とは抹殺され、今の皇室に都合のいいように過去の歴史が作爲された。神代の卷というものをわざわざ作った點などにも、皇室の權威をおしつけようとする意圖がろこつにあらわれている。

けれども、このようにいったただけでは、やはり一面的であろう。『古事記』全體は必ずしも右